

『更級日記』の和歌用語

— 品詞分解一覧・和歌用語索引 —

藤館 清香

『更級日記』品詞分解一覧（付属語を除く）

【凡例】

一、本一覧は、『更級日記』の和歌を品詞分解し、和歌の構成要素となる語を示したものである。ただし、付属語（助詞、助動詞）に相当するものは除く。

一、和歌の本文、表記、歌番号は新編国歌大観に拠る。ただし、46番歌のみ短連歌となっていて、七七の短句と五七五の長句とで詠者が異なるため、次のように番号をふる。

46a 花見に行くとき君を見るかな

46b 千ぐさなる心ならひに秋の野の

一、項目はすべて歴史的仮名遣いによる平仮名で掲げた。意味識別の便宜上、適宜、その意味にあたる漢字または語意を項目の下の（ ）内に示す。

一、活用語は基本的に終止形で項目を立てる。
一、動詞の連用形が名詞になったものや、形容詞の語幹に接尾辞の

「さ」がついて名詞になったものについては、語の下に「名詞」と示すこととする。

例…おもひ（思ひ）「名詞」

 ころほそさ（心細さ）「名詞」

一、そのほか、同じ語形でも品詞が違うものがある場合は、適宜、語の下に品詞名を示す。

（動詞の扱い）

一、活用の種類が複数ある動詞は、語の下の「」内に活用の種類を記す。

例…たのむ（頼む）「下二段」

一、複合動詞の掲出方針は、東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明編『平安時代複合動詞索引』¹⁾に倣い、動詞連用形に動詞が下接したものを基本とする。

一、複合動詞は一語で項目を立て、更に二つの動詞を分解して示すこととする。

例…おもひしる（思ひ知る）

おもふ（思ふ）

しる（知る）

〈接頭辞・接尾辞の扱い〉

一、以下に示す接頭辞・接尾辞は、語に上接、または語に下接した状態で一語として項目を立て、更に分解して示すこととする。接頭辞・接尾辞は、語の下に「接頭辞」・「接尾辞」と示す。

（接頭辞）うち・かき・たち・を

（接尾辞）かぬ・がほ・ごと・さ・み

例…うちいづ（うち出づ）　　ふかみ（深み）

うち「接頭辞」　　ふかし（深し）

いづ（出づ）　　み「接尾辞」

〈連語の扱い〉

一、連語の場合、付属語（助詞、助動詞）を含むことがある。

例…時ならず

一、連語として掲出したものは、更に分解して掲げる。ただし、付属語については再掲出しない。

例…あきのよのつき（秋の夜の月）

あき（秋）

よ（夜）

つき（月）

〈掛詞の扱い〉

一、掛詞となる語は項目の下に*を記す。

例…そよ（葉ずれの音の意）*

そよ（其よ）*

一、掛詞となる活用語は、終止形に直さず、和歌で用いられている活用形のままで示すこととする。

例…あき（飽き）*

あき（秋）*

〈（代）名詞＋助詞」「副詞＋助詞」で成り立つ連語の扱い〉

一、次に示す連語は一語として項目を立て、掲出した後で更に分解して掲げることはしない。

いつか・この・ともに・ままに・わが（（代）名詞＋助詞）

なにか・なにに（（副詞＋助詞）

くつ（朽つ）
す（為）
この（此の）
かはばしら（河柱）
のこる（残る）
むかしのあと（昔の跡）
むかし（昔）

あと(跡)

いかで

しる(知る)

2まどろまじこよひならではいつか見むくろとのほまの秋のよの月

まどろむ(微睡む)

こよひ(今宵)

いつか

みる(見る)

くろとのほま(くろとの涙)

くろと

はま(浜)

あきのよのつき(秋の夜の月)

あきのよ(秋の夜)

あき(秋)

よ(夜)

つき(月)

3あらしこそふきこぼりけれみやち山まだもみぢばのちらでのこれ

る

あらし(嵐)

ふきく(吹き来)

ふく(吹く)

く(来)

みやぢやま(宮路山)

まだ

もみぢば(もみぢ葉)

ちる(散る)

のこる(残る)

4たのめしを猶やまつべき霜がれし梅をも春はわすれざりけり

たのむ(頼む)「下二段」

なほ(猶)

まつ(待つ)

しもがる(霜枯る)⁽²⁾

しも(霜)

かる(枯る)

むめ(梅)

はる(春)

わする(忘る)「下二段」

5猶たのめ梅のたちえはちぎりおかぬおもひのほかの人もとふなり

なほ(猶)

たのむ(頼む)「四段」

むめのたちえ(梅の立ち枝)

むめ(梅)

たちえ(立ち枝)

ちぎりおく(契り置く)

ちぎる (契る)

おく (置く)

おもひのほか (思ひの外)

おもひ (思ひ) 「名詞」

ほか (外)

ひと (人)

とふ (訪ふ)

6 ちる花も又こむ春は見もやせむやがてわかれし人ぞこひしき

ちる (散る)

はな (花)

また

く (来)

はる (春)

みる (見る)

す (為)

やがて

わかる (別る)

ひと (人)

こひし (恋し)

7 時ならずふる雪かとぞながめまし花橘のかをらざりせば

ときならず (時ならず)

とき (時)

ふる (降る)

ゆき (雪)

ながむ (眺む)

はなたちばな (花橘)

かをる (香る)

8 いづこにもおとらじものをわがやどの世を秋はつるけしきばかり

は

いづこ

おとる (劣る)

わがやど (我が宿)

わが (我が)

やど (宿)

よ (世)

あきはつ (飽き果つ) *

あき (飽き) *

あき (秋) *

はつ (果つ)

けしき (気色)

9 さくどまちりぬとなげく春はただわがやどがほに花を見るかな

さく (咲く)

まつ (待つ)

ちる (散る)

なげく(嘆く)

はる(春)

ただ

わがやどがほ(我が宿顔)

わが(我が)

やどがほ(宿顔)

やど(宿)

がほ(顔)「接尾辞」

はな(花)

みる(見る)

10 あかざりしやどの桜を春くれてちりがたにしもひとめ見しかな

あく(飽く)

やど(宿)

さくら(桜)

はる(春)

くる(暮る)

ちりがた(散りがた)

ひとめ(一目)

みる(見る)

11 ちぎりけむ昔のけふのゆかしさにあまの河なみうちいでつるかな

ちぎる(契る)

むかしのけふ(昔の今日)

むかし(昔)

けふ(今日)

ゆかしさ「名詞」

ゆかし

さ「接尾辞」

あまのかはなみ(天の河浪)

あまのがは(天の河)

なみ(浪)

うちいづ(うち出づ)

うち「接頭辞」

いづ(出づ)

12 たちいづるあまの河辺のゆかしさにつねはゆゆしきこともわすれぬ

ぬ

たちいづ(たち出づ)

たち「接頭辞」

いづ(出づ)

あまのかはべ(天の河辺)

あまのかは(天の河)

へ(辺)

ゆかしさ「名詞」

ゆかし

さ「接尾辞」

つね(常)

ゆゆし

こと(事)

わする(忘る)「下二段」

13 ふえのねのただ秋風ときこゆるになどをぎのはのそよとこたへぬ

ふえのね(笛の音)

ふえ(笛)

ね(音)

ただ

あきかぜ(秋風)

あき(秋)

かぜ(風)

きこゆ(聞こゆ)

など

をぎのは(萩の葉)

をぎ(萩)

は(葉)

そよ(葉ずれの音の意) *

そよ(其よ) *

こたふ(答ふ)

14 をぎのはのこたふるまでもふきよらでただにすぎぬるふえのねぞ

うき

をぎのは(萩の葉)

をぎ(萩)

は(葉)

こたふ(答ふ)

ふきよる(吹き寄る)

ふく(吹く)

よる(寄る)

ただなり(直なり)

すぐ(過ぐ)

ふえのね(笛の音)

ふえ(笛)

ね(音)

うし(憂し)

15 にほひくるとなりの風を身にしめてありしのきはのむめぞこひし

き

にほひく(匂ひ来)

にほふ(匂ふ)

く(来)

となり(隣)

かぜ(風)

み(身)

しむ(染む)「下二段」

あり

のきばのむめ(軒端の梅)

のきば(軒端)

むめ(梅)

こひし(恋し)

16 うづもれぬかばねをなににたづねけむこけのしたには身こそなり

けれ

うづもる(埋もる)

かばね(屍)

なにに(何に)

たづぬ(尋ぬ)

こけのした(苔の下)

こけ(苔)

した(下)

み(身)

なる(成る)

17 ふるさとにかくこそ人はかへりけれあはれいかなるわかれなりけ

む

ふるさと(古里)

かく(斯く)

ひと(人)

かへる(帰る)

あはれ(哀れ) [感動詞]

いかなり

わかれ(別れ) [名詞]

18 かきながすあととはつららにとちてけりなをわすれぬかたみとか

見む

かきながす(かき流す)

かき [接頭辞]

ながす(流す)

あと(跡)

つらら(氷柱)

とづ(閉づ)

なに(何) [代名詞]

わする(忘る) [下二段]

かたみ(形見)

みる(見る)

19 なぐさむる方もなきさのはまちどりなにかうき世にあともとどめ

む

なぐさむ(慰む)

かた(濁) *

かた(方) *

なきさ(渚) *

なき(無き) *

はまちどり(浜千鳥)

なにか(何か)

うきよ(憂き世)

うし(憂し)

よ(世)

あと(跡)

とどむ(留む)

20のほりけむのべは煙もなかりけむいづこをはかたとたづねてか見し

のほる(昇る)

のべ(野辺)

けぶり(煙)

なし(無し)

いづこ

はか(目安・見当の意) *

はか(墓) *

たづぬ(尋ぬ)

みる(見る)

21そこはかとしりてゆかねどさきにたつなみだぞみちのしるべなり

ける

そこはかと *

そこ(其処) *

はか(墓) *

しる(知る)

ゆく(行く)

さき(先)

たつ(立つ)

なみだ(涙)

みち(道)

しるべ(標)

22すみなれぬのべのささはらあととはかもなくいかにたづねわび

けむ

すみなる(住み慣る)

すむ(住む)

なる(慣る)

のべのささはら(野辺の笹原)

のべ(野辺)

ささはら(笹原)

あととはかもなし *

はか(墓) *

なし(無し) *

なくなく(泣く泣く) *

いかに

たづねわぶ(尋ね侘ぶ)

たづぬ(尋ぬ)

わぶ (佐ぶ)

23 見しままにもえし煙はつきにしをいかがたづねし野べのささはら

みる (見る)

ままに

もゆ (燃ゆ)

けぶり (煙)

つく (尽く)

いかが

たづぬ (尋ぬ)

のべのささはら (野辺の笹原)

のべ (野辺)

ささはら (笹原)

24 ゆきふりてまれの人もたえぬらむよしのの山のみねのかけみち

ゆき (雪)

ふる (降る)

まれ (稀)

ひとめ (人目)

たゆ (絶ゆ)

よしののやま (吉野の山)

よしの (吉野)

やま (山)

みね (峰)

かけみち (懸け道)

25 あくるまつかねのこゑにもゆめさめて秋のもも夜の心地せしかな

あく (明く)

まつ (待つ)

かねのこゑ (鐘の声)

かね (鐘)

こゑ (声)

ゆめ (夢)

さむ (覚む)

あき (秋)

ももよ (百夜)

こちす (心地為)

こち (心地)

す (為)

26 あかつきをなににまちけむ思ふ事なるともきかねかのおとゆゑ

あかつき (暁)

な (何に)

まつ (待つ)

おもふ (思ふ)

こと (事)

なる (成る) *

なる (鳴る) *

きく(聞く)

かねのおと(鐘の音)

かね(鐘)

おと(音)

ゆゑ(故)

27 たたくともたれかくひなのくれぬるにやまぢをふかくたづねては

こむ

たたく(叩く)

たれ(誰)

くひな(水鶏) *

く(来) *

くる(暮る)

やまぢ(山路)

ふかし(深し)

たづぬ(尋ぬ)

く(来)

28 おく山のいしまの水をむすびあげてあかぬものとはいまのみやし

る

おくやま(奥山)

いしま(石間)

みづ(水)

むすびあぐ(掬び上ぐ)

むすぶ(掬ぶ)

あぐ(上ぐ)

あく(飽く)

もの

いま(今)

しる(知る)

29 山の井のしづくににごる水よりもこは猶あかぬ心地こそすれ

やまのゐ(山の井)

やま(山)

ゐ(井)

しづく(滴)

にごる(濁る)

みづ(水)

こ(此)

なほ(猶)

あく(飽く)

こち(心地)

す(為)

30 山のはにいり日のかげはいりはてて心ほそくぞながめやられし

やまのは(山の端)

やま(山)

は(端)

いりひ (入目)

かげ (影)

いりはつ (入り果つ)

いる (入る) [四段]

はつ (果つ)

こころぼそし (心細し)

ながめやる (眺め遣る)

ながむ (眺む)

やる (遣る)

31 たれに見せたれにきかせむ山ざとのこのあかつきもをちかへるね

も

たれ (誰)

みす (見す) [下二段]

たれ (誰)

きく (聞く)

やまざと (山里)

この (此の)

あかつき (暁)

をちかへる (復ち返る)

をつ (復つ)

かへる (返る)

ね (音)

32 みやこにはまつらむものを郭公けふ日ねもすになきくらすかな

みやこ (都)

まつ (待つ)

ほととぎす (郭公)

けふ (今日)

ひねもす (終日)

なきくらす (鳴き暮らす)

なく (鳴く)

くらす (暮らす)

33 山ふかくたれか思ひはおこすべき月見る人はおほからめども

やま (山)

ふかし (深し)

たれ (誰)

おもひ (思ひ) [名詞]

おこす (遣す)

つき (月)

みる (見る)

ひと (人)

おほし (多し)

34 ふかき夜に月見るをりはしらねどもまづ山ざとぞ思ひやらるる

ふかきよ (深き夜)

ふかし (深し)

よ(夜)

つき(月)

みる(見る)

をり(折)

しる(知る)

まづ(先づ)

やまざと(山里)

おもひやる(思ひ遣る)

おもふ(思ふ)

やる(遣る)

35 秋の夜のつまこひかぬるしかのねはとほ山にこそきくべかりけれ

あきのよ(秋の夜)

あき(秋)

よ(夜)

つま(妻)

こひかぬ(恋ひかぬ)

こふ(恋ふ)

かぬ「接尾辞」

しかのね(鹿の音)

しか(鹿)

ね(音)

とほやま(遠山)

きく(聞く)

36 まだひとめしらぬ山辺の松風もおととしてかへるものこそきけ

まだ

ひとめ(人目)

しる(知る)

やまべ(山辺)

まつかぜ(松風)

まつ(松)

かぜ(風)

おと(音)

す(為)

かへる(帰る)

もの

きく(聞く)

37 思ひしる人に見せばや山ざとの秋のよふかきありあけの月

おもひしる(思ひ知る)

おもふ(思ふ)

しる(知る)

ひと(人)

みす(見す)「下二段」

やまざと(山里)

あきのよ(秋の夜)

あき(秋)

よ(夜)

よふかし(夜深し)

よ(夜)

ふかし(深し)

ありあけのつき(在明の月)

ありあけ(在明)

つき(月)

38なはしろの水かげばかり見えし田のかりはつるまでながるしにけり

なはしろ(苗代)

みづかげ(水影)

みゆ(見ゆ)

た(田)

かりはつ(刈り果つ)

かる(刈る)

はつ(果つ)

ながるす(長居為)

ながる(長居)

す(為)

39水さへぞすみたえにけるこのはちるあらしの山の心ほそさにみづ(水)

すみたゆ(澄み絶ゆ)*

すみ(澄み)*

すみ(住み)*

たゆ(絶ゆ)

このは(木の葉)

き(木)

は(葉)

ちる(散る)

あらし(嵐)

やま(山)

こころほそさ(心細さ) [名詞]

こころほそし(心細し)

さ [接尾辞]

40ちぎりおきし花のさかりをづけぬかな春やまだこぬ花やにほはぬ

ちぎりおく(契り置く)

ちぎる(契る)

おく(置く)

はなのさかり(花の盛り) [名詞]

はな(花)

さかり(盛り) [名詞]

つぐ(告ぐ)

はる(春)

まだ

く(来)

はな(花)

にほふ(匂ふ)

41 竹の葉のそよぐ夜ごとにねざめしてなにともなきに物ぞかなしき

たけのは(竹の葉)

たけ(竹)

は(葉)

そよぐ(戦ぐ)

よごと(夜毎)*

よ(夜)*

よ(節)*

ごと(毎)「接尾辞」

ねざめ(寢覚)

す(為)

なに(何)「代名詞」

なし(無し)

もの

かなし(悲し)

42 いづことも露のあはれはわかれじをあさちがはらの秋ぞこひしき

いづこ

つゆ(露)

あはれ(哀れ)「名詞」

わかる(分る)

あさちがはら(浅茅が原)

あさち(浅茅)

はら(原)

あき(秋)

こひし(恋し)

43 あさくらやいまは雲井にきくものを猶木のまろがなのりをやする

あさくら(朝倉)

いま(今)

くもみ(雲井)

きく(聞く)

なほ(猶)

このまろ(木の丸)*

き(木)

まろ(丸)

このまろ(此の磨)*

この(此の)

まろ(磨)

なのり(名告り)

す(為)

44 おもふ事心になふ身なりせば秋のわかれをふかくしらまし

おもふ (思ふ)

こと (事)

こころ (心)

かなふ (叶ふ)

み (身)

あき (秋)

わかれ (別れ) 「名詞」

ふかし (深し)

しる (知る)

45 かけてこそおもはざりしかこの世にてしばしもきみにわかるべし

とは

かけて

おもふ (思ふ)

このよ (此の世)

この (此の)

よ (世)

しばし (暫し)

きみ (君)

わかる (別る)

46a 花見にゆくときみを見るかな

はな (花)

みる (見る)

ゆく (行く)

きみ (君)

みる (見る)

46b 千ぐさなる心ならひに秋のの

ちぐさ (千草) *

ちぐさ (千種) *

こころならひ (心習ひ)

こころ (心)

ならひ (習ひ) 「名詞」

あき (秋)

の (野)

47 秋をいかに思ひいづらむ冬ふかみあらしにまどふをぎのかれはは

あき (秋)

いかに

おもひいづ (思ひ出づ)

おもふ (思ふ)

いづ (出づ)

ふゆ (冬)

ふかみ (深み)

ふかし (深し)

み 「接尾辞」

あらし (嵐)

まどふ (惑ふ)

をぎ (荻)

かれは (枯葉)

48 とどめおきてわがごと物や思ひけむ見るにかなしきこしのびのも

り

とどめおく (留め置く)

とどむ (留む)

おく (置く)

わが (我が)

ごと (如)

もの

おもふ (思ふ)

みる (見る)

かなし (悲し)

こしのびのもり (子しのびの森) *

こしのび (子しのび) *

こしのび (子忍び) *

もり (森)

49 こしのびをきくにつけてもとどめおきてちちぶの山のつらきあじ

まち

こしのび (子しのび) *

こしのび (子忍び) *

きく (聞く)

つく (付く)

とどめおく (留め置く)

とどむ (留む)

おく (置く)

ちちぶのやま (秩父の山) *

ちちぶ (秩父) *

ちち (父) *

やま (山)

つらし (辛し)

あづまち (東路)

50 なみださへふりはへつつぞ思ひやるあらしふくらむ冬の山ごと

なみだ (涙)

ふりはふ (振り延ふ) *

ふる (振る) *

ふる (降る) *

はふ (延ふ)

おもひやる (思ひ遣る)

おもふ (思ふ)

やる (遣る)

あらし (嵐)

ふく (吹く)

ふゆ(冬)

やまざと(山里)

51 わけてとふ心のほどに見ゆるかなこかげをぐらき夏のしげりを

わく(分く)

とふ(訪ふ)

こころ(心)

ほど(程)

みゆ(見ゆ)

こかげ(木蔭)

をぐらし(を暗し)

を「接頭辞」

くらし(暗し)

なつ(夏)

しげり(繁り)「名詞」

52 かかる世もありけるものをかぎりときみにわかれし秋はいかに

ぞ

かかり(斯かり)

よ(夜)*

よ(世)*

あり

かぎり(限り)

きみ(君)

わかる(別る)

あき(秋)

いかに

53 思ふ事かなはずなぞといとひこしいのちのほどもいまぞうれしき

おもふ(思ふ)

こと(事)

かなふ(叶ふ)

なぞ(何ぞ)

いとひく(厭ひ来)

いとふ(厭ふ)

く(来)

いのち(命)

ほど(程)

いま(今)

うれし(嬉し)

54 思ひいでて人こそとはね山ざとのまがきのをぎに秋風はふく

おもひいづ(思ひ出づ)

おもふ(思ふ)

いづ(出づ)

ひと(人)

とふ(訪ふ)

やまざと(山里)

まがき(籬)

をぎ(荻)

あきかぜ(秋風)

あき(秋)

かぜ(風)

ふく(吹く)

55 年はくれ夜はあけがたの月かげのそでにうつれるほどぞはかなき

とし(年)

くる(暮る)

よ(夜)

あけがた(明け方)

つきかげ(月影)

つき(月)

かげ(影)

そで(袖)

うつる(映る)

ほど(程)

はかなし(果敢無し)

56 いくちたび水の田せりをつみしかば思ひしことにつゆもかなはぬ

いくちたび(幾千度)

いく(幾)

ちたび(千度)

みづ(水)

たぜり(田芹)

つむ(摘む)

おもふ(思ふ)

こと(事)

つゆ(露)

かなふ(叶ふ)

57 あまのとを雲井ながらもよそに見てむかしのあとをこふる月かな

あまのと(天の戸)

あま(天)

と(戸)

くもゐ(雲井)

よそ(余所)

みる(見る)

むかしのあと(昔の跡)

むかし(昔)

あと(跡)

こふ(恋ふ)

つき(月)

58 月もなく花も見ざりし冬のよの心にしみてこひしきやなぞ

つき(月)

なし(無し)

はな(花)

みる(見る)

ふゆのよ(冬の夜)

ふゆ(冬)

よ(夜)

こころ(心)

しむ(染む)〔四段〕

こひし(恋し)

なぞ(何ぞ)

59 さえし夜の氷は袖にまだとけで冬の夜ながらねをこそはなけ

さゆ(牙ゆ)

よ(夜)

こほり(氷)

そで(袖)

まだ

とく(溶く)〔下二段〕

ふゆのよ(冬の夜)

ふゆ(冬)

よ(夜)

ね(音)

なく(泣く)

60 わがごとぞ水のうきねにあかしつつうはげのしもをはらひわぶな

る

わが(我が)

ごと(如)

みづ(水)

うきね(浮き寝) *

うき(浮き) *

うき(憂き) *

あかす(明かす)

うはげのしも(上毛の霜)

うはげ(上毛)

しも(霜)

はらひわぶ(払ひ侘ぶ)

はらふ(払ふ)

わぶ(侘ぶ)

61 ましておもへ水のかりねのほどだにぞうはげのしもをはらひわび

ける

まして(況して)

おもふ(思ふ)

みづ(水)

かりね(仮寝)

ほど(程)

うはげのしも(上毛の霜)

うはげ(上毛)

しも(霜)

はらひわぶ(払ひ侘ぶ)

はらふ(払ふ)

わぶ(侘ぶ)

62 冬がれのしののをすすき袖たゆみまねきもよせじ風にまかせむ

ふゆがれ(冬枯れ)「名詞」

ふゆ(冬)

かれ(枯れ)「名詞」

しののをすすき(篠のを薄)

しの(篠)

を「接頭辞」

すすき(薄)

そで(袖)

たゆみ(弛み)

たゆし(弛し)

み「接尾辞」

まねく(招く)

よす(寄す)

かぜ(風)

まかす(任す)

63 あさ緑花もひとつにかすみつつおぼろに見ゆる春の夜の月

あさみどり(浅緑)

はな(花)

ひとつ(一つ)

かすみ(霞む)

おぼろなり(朧なり)

みゆ(見ゆ)

はるのよのつき(春の夜の月)

はるのよ(春の夜)

はる(春)

よ(夜)

つき(月)

64 こよひより後のいのちのもしもあらばさは春の夜をかたみとおも

はむ

こよひ(今宵)

のち(後)

いのち(命)

もしも(若しも)

あり

さは(然は)

はるのよ(春の夜)

はる(春)

よ(夜)

かたみ (形見)
おもふ (思ふ)

65 人はみな春に心をよせつめり我のみや見む秋のよの月

ひと (人)

みな (皆)

はる (春)

こころ (心)

よす (寄す)

われ (我)

みる (見る)

あきのよのつき (秋の夜の月)

あきのよ (秋の夜)

あき (秋)

よ (夜)

つき (月)

66 なにさまで思ひいでけむなほざりのこのはにかけししぐればかり
を

なに (何) [副詞]

さ (然)

おもひいづ (思ひ出づ)

おもふ (思ふ)

いづ (出づ)

なほざりなり (等閑なり)

このは (木の葉)

き (木)

は (葉)

かく (掛く)

しぐれ (時雨)

67 かしまみてなるとのうらにこがれいづる心はえきやいそのあま

かしま (加島) *

ま (間) *

みる (見る)

なるとのうら (鳴門の浦) *

なると (鳴門) *

と (戸) *

うら (浦)

こがれいづ (漕がれ出づ) *

こがれ (漕がれ) *

こがれ (焦がれ) *

いづ (出づ)

こころ (心)

う (得)

いそ (磯)

あまびと (海人)

68 あふさかの関のせき風ふくこゑはむかしききしにかはらざりけり

あふさかのせき (逢坂の関)

あふさか (逢坂)

せき (関)

せきかぜ (関風)

せき (関)

かぜ (風)

ふく (吹く)

こゑ (声)

むかし (昔)

きく (聞く)

かはる (変る)

69 おとにのみききわたりこし宇治河のあじろの浪もけふぞかぞふる

おと (音)

ききわたる (聞き渡る)

きく (聞く)

わたる (渡る)

く (来)

うぢがは (宇治河)

あじろのなみ (網代の浪)

あじろ (網代)

なみ (浪)

けふ (今日)

かぞふ (数ふ)

70 おく山の紅葉のにしきほかよりもいかにしぐれてふかくそめけむ

おくやま (奥山)

もみぢ (紅葉)

にしき (錦)

ほか (他)

いかに

しぐる (時雨る)

ふかし (深し)

そむ (染む) 「下二段」

71 谷河の流は雨ときこゆれどほかよりけなる在明の月

たにがは (谷河)

ながれ (流れ) 「名詞」

あめ (雨)

きこゆ (聞こゆ)

ほか (他)

けなる (異なり)

ありあけのつき (在明の月)

ありあけ (在明)

つき (月)

72 はつせ河立帰りつつたづぬれば⁵すぎのしるしもこのたびや見む

はつせがは(初瀬河)

たちかへる(立ち帰る)*

たつ(立つ)

かへる(帰る)*

かへる(返る)*

たづぬ(尋ぬ)

すぎのしるし(杉の標)

すぎ(杉)

しるし(標)

このたび(此の度)

この(此の)

たび(度)

みる(見る)

73 ゆくへなきたびのそらにもおくれぬはみやこにて見しありあけの

月

ゆくへ(行方)

なし(無し)

たびのそら(旅の空)

たび(旅)

そら(空)

おくる(遅る)

みやこ(都)

みる(見る)

ありあけのつき(在明の月)

ありあけ(在明)

つき(月)

74 たえざりし思ひも今はたえにけりこしのわたりの雪のふかさに

たゆ(絶ゆ)

おもひ(思ひ)「名詞」*

ひ(火)*

いま(今)

たゆ(絶ゆ)

こしのわたり(越のわたり)

こし(越)

わたり(辺)

ゆき(雪)

ふかさ(深さ)

ふかし(深し)

さ「接尾辞」

75 しら山のゆきのしたなるさざれいしの中のおもひはさえむものか

は

しらやま(白山)

ゆき(雪)

した(下)

さざれいし(細石)

なか(中)

おもひ(思ひ)「名詞」*

ひ(火)*

きゆ(消ゆ)

もの

76 さととほみあまりおくなるやまちには花見にとても人こざりけり

さと(里)

とほみ(遠み)

とほし(遠し)

み「接尾辞」

あまり

おく(奥)

やまち(山路)

はな(花)

みる(見る)

ひと(人)

く(来)

77 しげかりしうき世の事もわすられずいりあひのかねの心ほそさに

しげし(繁し)

うきよ(憂き世)

うし(憂し)

よ(世)

こと(事)

わする(忘る)「四段」

いりあひのかね(入相の鐘)

いりあひ(入相)

かね(鐘)

こころほそさ(心細さ)「名詞」

こころほそし(心細し)

さ「接尾辞」

78 袖ぬるるあらいそ浪としりながらともにかづきをせしぞこひしき

そで(袖)

ぬる(濡る)

あらいそなみ(荒磯浪)

あらいそ(荒磯)

なみ(浪)

しる(知る)

ともに(共に)

かづき(潜き)「名詞」

す(為)

こひし(恋し)

79 あらいそはあされどなにかひなくてうしほにぬるるあまのそで

かな

あらいそ(荒磯)

あさる(漁る)

なに(何)「代名詞」

かひ(貝) *

かひ(効) *

なし(無し)

うしほ(潮)

ぬる(濡る)

あま(海人)

そで(袖)

80 見るめおふる浦にあらずはあらいそのなみまかぞふるあまもあら

じを

みるめ(海松布) *

みるめ(見る目) *

おふ(生ふ)

うら(浦)

あり

あらいそ(荒磯)

なみま(浪間)

かぞふ(数ふ)

あま(海人)

あり

81 夢さめてねざめのとこのうくばかりこひきとつげよにしへゆく月

ゆめ(夢)

さむ(覚む)

ねざめ(寢覚)

とこ(床)

うく(浮く)

こふ(恋ふ)

つぐ(告ぐ)

にし(西)

ゆく(行く)

つき(月)

82 いかにいひなにととへてかたらまし秋のゆふべのすみよしのう

ら

いかに

いふ(言ふ)

なに(何)「代名詞」

たとふ(譬ふ)

かたる(語る)

あきのゆふべ(秋の夕べ)

あき(秋)

ゆふべ(夕べ)

すみよしのうら(住吉の浦)

すみよし(住吉)

うら(浦)

83あるる海に風よりさきにふなでしていしづの浪ときえなましかば

ある(荒る)

うみ(海)

かぜ(風)

さき(先)

ふなで(舟出)

す(為)

いしづ(石津)

なみ(浪)

きゆ(消ゆ)

84月もいででやみにくれたるをばすてになにとてこよひたづねきつ

らむ

つき(月)

いづ(出づ)

やみ(闇)

くる(暮る)

をばすて(姨捨)

なに(何)〔代名詞〕

こよひ(今宵)

たづねく(尋ね来)

たづぬ(尋ぬ)

く(来)

85いまは世にあらじ物とや思ふらむあはれなく猶こそはふれ

いま(今)

よ(世)

あり

もの

おもふ(思ふ)

あはれ(哀れ)〔感動詞〕

なくなく(泣く泣く)

なほ(猶)

ふ(経)

86ひまもなき涙にくもる心にもあかしと見ゆる月のかげかな

ひま(暇)

なし(無し)

なみだ(涙)

くもる(曇る)

こころ(心)

あかし(明かし)

みゆ(見ゆ)

つき(月)

かげ(影)

87 しげりゆくよもぎがつゆにそほちつ人にとはれぬねをのみぞな

く

しげりゆく(茂り行く)

しげる(茂る)

ゆく(行く)

よもぎ(蓬)

つゆ(露)

そほつ(濡つ)

ひと(人)

とふ(訪ふ)

ね(音)

なく(泣く)

88 世のつねのやどのよもぎを思ひやれそむきはてたるにはのくさむ

ら

よのつね(世の常)

よ(世)

つね(常)

やど(宿)

よもぎ(蓬)

おもひやる(思ひ遣る)

おもふ(思ふ)

やる(遣る)

そむきはつ(背き果つ)

そむく(背く)

はつ(果つ)

には(庭)

くさむら(草叢)

『更級日記』和歌用語索引

【凡例】

一、本索引は、『更級日記』品詞分解一覧(付属語を除く)で掲出した語を五十音順に並べ、その語が使われた歌番号を列挙したものである。

一、項目の下の算用数字は新編国歌大観の歌番号を示す。なお、品詞分解一覧と同様に、46番歌のみ、「花見に行く」と君を見るかな」に含まれる用語を46a、「千ぐさなる心ならひに秋の野の」に含まれる用語を46bで示すこととする。

一、複合語・連語として掲出したものは、更に分解して掲げる。伊藤一男作成の「浮舟和歌用語索引」⁶⁾に倣い、分解して掲げた語の歌番号には、() を付した。また、掛詞には「」を付した。なお、『更級日記』品詞分解一覧(付属語を除く)では掛詞は終止形に直さずに和歌本文の活用形のままとしたが、本索引では終止形に直して掲出する。

例…あきはつ(飽き果つ)〔8〕

- あき(秋)〔8〕
あく(飽く)〔8〕
- あかし(明かし) 86
あかす(明かす) 60
あかつき(暁) 26 31
- あき(秋) (2) (〔8〕) (13) 25 (35) (37) 42 44 46b 47 52 (54)
(65) (82)
- あきかぜ(秋風) 13 54
あきのゆふべ(秋の夕べ) 82
あきのよ(秋の夜) (2) 35 37 (65)
あきのよのつき(秋の夜の月) 2 65
あきはつ(飽き果つ)〔8〕
あく(明く) 25
- あく(飽く) (〔8〕) 10 28 29
あぐ(上ぐ) (28)
- あけがた(明け方) 55
あさくら(朝倉) 43
あさぢ(浅茅) (42)
- あさぢがはら(浅茅が原) 42
あさみどり(浅緑) 63
あさる(漁る) 79
- あじろ(網代) (69)
あじろのなみ(網代の浪) 69
あづまち(東路) 49
あと(跡) (1) 18 19 (57)
あとはかもなし〔22〕
- あはれ(哀れ)〔名詞〕42
あはれ(哀れ)〔感動詞〕17 85
あふさか(逢坂) (68)
あふさかのせき(逢坂の関) 68
あま(天) (57)
あま(海人) 79 80
あまのがは(天の河) (11) (12)
あまのかはなみ(天の河浪) 11
あまのかはべ(天の河辺) 12
あまのと(天の戸) 57
あまびと(海人) 67
あまり 76
あめ(雨) 71
あらいそ(荒磯) (78) 79 80
あらいそなみ(荒磯浪) 78
あらし(嵐) 3 39 47 50
あり 15 52 64 80 80 85

- ありあけ(在明) (37) (71) (73)
 ありあけのつき(在明の月) 37 71 73
 ある(荒る) 83
 いかが 23
 いかで 1
 いかなり 17
 いかに 22 47 52 70 82
 いく(幾) (56)
 いくちたび(幾千度) 56
 いしづ(石津) 83
 いしま(石間) 28
 いそ(磯) 67
 いづ(出づ) (11) (12) (47) (54) (66) (67) 84
 いつか 2
 いづこ 8 20 42
 いとひく(厭ひ来) 53
 いとふ(厭ふ) (53)
 いのち(命) 53 64
 いふ(言ふ) 82
 いま(今) 28 43 53 74 85
 いりあひ(入相) (77)
 いりあひのかね(入相の鐘) 77
 いろはつ(入り果つ) 30
 いろひ(入日) 30
 いる(入る) 「四段」 (30)
 う(得) 67
 うきね(浮き寝) (60)
 うきよ(憂き世) 19 77
 うく(浮く) (60) 81
 うし(憂し) 14 (19) (60) (77)
 うしほ(潮) 79
 うち「接頭辞」 (11)
 うちいづ(うち出づ) 11
 うちがは(宇治河) 69
 うづもる(埋もる) 16
 うつる(映る) 55
 うはげ(上毛) (60) (61)
 うはげのしも(上毛の霜) 60 61
 うみ(海) 83
 うら(浦) (67) 80 (82)
 うれし(嬉し) 53
 おく(奥) 76
 おく(置く) (5) (40) (48) (49)
 おくやま(奥山) 28 70

- おくる (遅る) 73
 おこす (遣す) 33
 おと (音) (26) 36 69
 おとる (劣る) 8
 おふ (生ふ) 80
 おほし (多し) 33
 おぼろなり (朧なり) 63
 おもひ (思ひ) 「名詞」 (5) 33 (74) (75)
 おもひいづ (思ひ出づ) 47 54 66
 おもひしる (思ひ知る) 37
 おもひのほか (思ひの外) 5
 おもひやる (思ひ遣る) 34 50 88
 おもふ (思ふ) 26 (34) (37) 44 45 (47) 48 (50) 53 (54) 56 61
 64 (66) 85 (88)
 かかり (斯かり) 52
 かき 「接頭辞」 (18)
 かきながす (かき流す) 18
 かぎり (限り) 52
 かく (掛く) 66
 かく (斯く) 17
 かげ (影) 30 (55) 86
 かけて 45
 かけみち (懸け道) 24
 かしま (加島) (67)
 かすむ (霞む) 63
 かぜ (風) (13) 15 (36) (54) 62 (68) 83
 かぞふ (数ふ) 69 80
 かた (方) (19)
 かた (渴) (19)
 かたみ (形見) 18 64
 かたる (語る) 82
 かづき (潜き) 「名詞」 78
 かなし (悲し) 41 48
 かなふ (叶ふ) 44 53 56
 かぬ 「接尾辞」 (35)
 かね (鐘) (25) (26) (77)
 かねのおと (鐘の音) 26
 かねのこゑ (鐘の声) 25
 かばね (屍) 16
 かはばしら (河柱) 1
 かはる (変る) 68
 かひ (貝) (79)
 かひ (効) (79)
 かへる (返る) (31) (72)

かへる(帰る) 17 36 (72)
 がほ(顔)「接尾辞」(9)
 かりね(仮寝) 61
 かりはつ(刈り果つ) 38
 かる(刈る) (38)
 かる(枯る) (4)
 かれ(枯れ)「名詞」(62)
 かれは(枯葉) 47
 かをる(香る) 7
 き(木) (39) (43) (66)
 ききわたる(聞き渡る) 69
 きく(聞く) 26 31 35 36 43 49 68 (69)
 きこゆ(聞こゆ) 13 71
 きみ(君) 45 46a 52
 きゆ(消ゆ) 75 83
 く(来) (3) 6 (15) (27) 27 40 (53) 69 76 (84)
 くさむら(草叢) 88
 くつ(朽つ) 1
 くひな(水鶏) (27)
 くもる(曇る) 86
 くもる(雲井) 43 57
 くらし(暗し) (51)

くらす(暮らす) (32)
 くる(暮る) 10 27 55 84
 くろと(2)
 くろとのはま(くろとの浜) 2
 けしき(気色) 8
 けなり(異なり) 71
 けふ(今日) (11) 32 69
 けぶり(煙) 20 23
 こ(此) 29
 こかげ(木蔭) 51
 こがる(焦がる) (67)
 こがる(漕がる) (67)
 こがれいづ(漕がれ出づ) (67)
 こけ(苔) (16)
 こけのした(苔の下) 16
 こち(心地) (25) 29
 こちす(心地為) 25
 ころ(心) 44 (46b) 51 58 65 67 86
 ころならひ(心習ひ) 46b
 ころぼそさ(心細さ)「名詞」 39 77
 ころぼそし(心細し) 30 (39) (77)
 こし(越) (74)

こしのび (子忍び) (48) (49)
 こしのび (子しのび) (48) (49)
 こしのびのもり (子しのびの森) (48)
 こしのわたり (越のわたり) 74
 こたふ (答ふ) 13 14
 こと (事) 12 26 44 53 56 77
 ごと (如) 48 60
 ごと (毎) 「接尾辞」 (41)
 この (此の) 1 31 (43) (45) (72)
 このたび (此の度) 72
 このは (木の葉) 39 66
 このまろ (木の丸) (43)
 このまろ (此の磨) (43)
 このよ (此の世) 45
 こひかぬ (恋ひかぬ) 35
 こひし (恋し) 6 15 42 58 78
 こふ (恋ふ) (35) 57 81
 こほり (氷) 59
 こよひ (今宵) 2 64 84
 こゑ (声) (25) 68
 さ (然) 66
 さ 「接尾辞」 (11) (12) (39) (74) (77)

さかり (盛り) 「名詞」 (40)
 さき (先) 21 83
 さく (咲く) 9
 さくら (桜) 10
 ささはら (笹原) (22) (23)
 さざれいし (細石) 75
 さと (里) 76
 さは (然は) 64
 さむ (覚む) 25 81
 さゆ (冴ゆ) 59
 しか (鹿) (35)
 しかのね (鹿の音) 35
 しぐる (時雨) 70
 しぐれ (時雨) 66
 しげし (繁し) 77
 しげり (繁り) 「名詞」 51
 しげりゆく (茂り行く) 87
 しげる (茂る) (87)
 した (下) (16) 75
 しづく (滴) 29
 しの (篠) (62)
 しののをすすき (篠のを薄) 62

しばし(暫し) 45
しむ(染む)「四段」 58
しむ(染む)「下二段」 15
しも(霜) (4) (60) (61)
しもがる(霜枯る) 4
しらやま(白山) 75
しる(知る) 1 21 28 34 36 (37) 44 78
しるし(標) (72)
しるべ(標) 21
す(為) 1 6 (25) 29 36 (38) 41 43 78 83
すぎ(杉) (72)
すぎのしるし(杉の標) 72
すぐ(過ぐ) 14
すすき(薄) (62)
すみたゆ(澄み絶ゆ)〔39〕
すみなる(住み慣る) 22
すみよし(住吉) (82)
すみよしのうら(住吉の浦) 82
すむ(住む) (22) (39)
すむ(澄む) (39)
せき(関) (68) (68)
せきかぜ(関風) 68

そこ(其処) (21)
そこはかと〔21〕
そで(袖) 55 59 62 78 79
そほつ(濡つ) 87
そむ(染む)「下二段」 70
そむきはつ(背き果つ) 88
そむく(背く) (88)
そよ(其よ)〔13〕
そよ(葉ずれの音の意)〔13〕
そよぐ(戦ぐ) 41
そら(空) (73)
た(田) 38
たけ(竹) (41)
たけのは(竹の葉) 41
たぜり(田芹) 56
ただ 9 13
たたく(叩く) 27
ただなり(直なり) 14
たち「接頭辞」〔12〕
たちいづ(たち出づ) 12
たちえ(立ち枝) (5)
たちかへる(立ち帰る)〔72〕

- たつ(立つ) 21 (72)
 たづぬ(尋ぬ) 16 20 (22) 23 27 72 (84)
 たづねく(尋ね来) 84
 たづねわぶ(尋ね侘ぶ) 22
 たとふ(譬ふ) 82
 たにがは(谷河) 71
 たのむ(頼む) 「四段」 5
 たのむ(頼む) 「下二段」 4
 たび(度) (72)
 たび(旅) (73)
 たびのそら(旅の空) 73
 たゆ(絶ゆ) 24 (39) 74 74
 たゆし(弛し) (62)
 たゆみ(弛み) 62
 たれ(誰) 27 31 31 33
 ちぎりおく(契り置く) 5 40
 ちぎる(契る) (5) 11 (40)
 ちぐさ(千草) (46b)
 ちぐさ(千種) (46b)
 ちたび(千度) (56)
 ちち(父) (49)
 ちちぶ(秩父) (49)
- ちちぶのやま(秩父の山) (49)
 ちりがた(散りがた) 10
 ちる(散る) 3 6 9 39
 つき(月) (2) 33 34 (37) (55) 57 58 (63) (65) (71) (73) 81
 84 86
 つきかげ(月影) 55
 つく(付く) 49
 つく(尽く) 23
 つぐ(告ぐ) 40 81
 つね(常) 12 (88)
 つま(妻) 35
 つむ(摘む) 56
 つゆ(露) 42 56 87
 つらし(辛し) 49
 つらら(氷柱) 18
 と(戸) (57) (67)
 とき(時) (7)
 ときならず(時ならず) 7
 とく(溶く) 「下二段」 59
 とこ(床) 81
 とし(年) 55
 とづ(閉づ) 18

とどむ (留む) 19 (48) (49)
 とどめおく (留め置く) 48 49
 となり (隣) 15
 とふ (訪ふ) 5 51 54 87
 とほし (遠し) (76)
 とほみ (遠み) 76
 とほやま (遠山) 35
 ともに (共に) 78
 なか (中) 75
 ながす (流す) (18)
 ながむ (眺む) 7 (30)
 ながめやる (眺め遣る) 30
 ながれ (流れ) 「名詞」 71
 ながる (長居) (38)
 ながるす (長居為) 38
 なきくらす (鳴き暮らす) 32
 なぎさ (渚) (19)
 なく (泣く) 59 87
 なく (鳴く) (32)
 なくさむ (慰む) 19
 なくなく (泣く泣く) (22) 85
 なげく (嘆く) 9

なし (無し) (19) (20) (22) (41 58 73 79 86)
 なぞ (何ぞ) 53 58
 なつ (夏) 51
 など 13
 なに (何) 「代名詞」 18 41 79 82 84
 なに (何) 「副詞」 66
 なにか (何か) 19
 なにに (何に) 16 26
 なのり (名告り) 43
 なはしろ (苗代) 38
 なほ (猶) 4 5 29 43 85
 なほざりなり (等閑なり) 66
 なみ (浪) (11) (69) (78) 83
 なみだ (涙) 21 50 86
 なみま (浪間) 80
 ならひ (習ひ) 「名詞」 (46b)
 なる (成る) 16 (26)
 なる (慣る) (22)
 なる (鳴る) (26)
 なると (鳴門) (67)
 なるとのうら (鳴門の浦) (67)
 にごる (濁る) 29

にし(西) 81
にしき(錦) 70
には(庭) 88
にほひく(匂ひ来) 15
にほふ(匂ふ) (15) 40
ぬる(濡る) 78 79
ね(音) (13) (14) 31 (35) 59 87
ねざめ(寝覚) 41 81
の(野) 46b
のきば(軒端) (15)
のきばのむめ(軒端の梅) 15
のこる(残る) 1 3
のち(後) 64
のべ(野辺) 20 (22) (23)
のべのささはら(野辺の笹原) 22 23
のぼる(昇る) 20
は(葉) (13) (14) (39) (41) (66)
は(端) (30)
はか(墓) (20) (21) (22)
はか(目安・見当の意) (20)
はかなし(果敢無し) 55
はつ(果つ) (8) (30) (38) (88)

はつせがは(初瀬河) 72
はな(花) 6 9 (40) 40 46a 58 63 76
はなたちばな(花橋) 7
はなのさかり(花の盛り) [名詞] 40
はふ(延ふ) (50)
はま(浜) (2)
はまちどり(浜千鳥) 19
はら(原) (42)
はらひわぶ(払ひ侘ぶ) 60 61
はらふ(払ふ) (60) (61)
はる(春) 4 6 9 10 40 (63) (64) 65
はるのよ(春の夜) (63) 64
はるのよのつき(春の夜の月) 63
ひ(火) (74) (75)
ひと(人) 5 6 17 33 37 54 65 76 87
ひとつ(二つ) 63
ひとつめ(二目) 10
ひとつめ(人目) 24 36
ひねもす(終日) 32
ひま(暇) 86
ふ(経) 85
ふえ(笛) (13) (14)

- ふうのね (笛の音) 13 14
 ふうきよ (深き夜) 34
 ふうかさ (深さ) 74
 ふうかし (深し) 27 33 (34) (37) 44 (47) 70 (74)
 ふうかみ (深み) 47
 ふうきく (吹き来) 3
 ふうきよる (吹き寄る) 14
 ふうく (吹く) (3) (14) 50 54 68
 ふうなで (舟出) 83
 ふう (冬) 47 50 (58) (59) (62)
 ふうがれ (冬枯れ) 「名詞」 62
 ふうのよ (冬の夜) 58 59
 ふうりはふ (振り延ふ) (50)
 ふうる (降る) 7 24 (50)
 ふうる (振る) (50)
 ふうるさと (古里) 17
 へ (辺) (12)
 ほか (外) (5)
 ほか (他) 70 71
 ほど (程) 51 53 55 61
 ほととぎす (郭公) 32
 ま (間) (67)
 まがき (籬) 54
 まかす (任す) 62
 まして (況して) 61
 また 6
 まだ (未だ) 3 36 40 59
 まつ (松) (36)
 まつ (待つ) 4 9 25 26 32
 まづ (先づ) 34
 まつかぜ (松風) 36
 まどふ (惑ふ) 47
 まどろむ (微睡む) 2
 まねく (招く) 62
 ままに 23
 まれ (稀) 24
 まろ (丸) (43)
 まろ (磨) (43)
 み (身) 15 16 44
 み 「接尾辞」 (47) (62) (76)
 みす (見す) 「下二段」 31 37
 みち (道) 21
 みづ (水) 28 29 39 56 60 61
 みづかげ (水影) 38

- みな(皆) 65
 みね(峰) 24
 みやこ(都) 32 73
 みやぢやま(宮路山) 3
 みゆ(見ゆ) 38 51 63 86
 みる(見る) 2 6 9 10 18 20 23 33 34 46a 46a 48 57 58 65 67
 72 73 76
 みるめ(見る目)〔80〕
 みるめ(海松布)〔80〕
 むかし(昔)〔1〕〔11〕〔57〕 68
 むかしのあと(昔の跡) 1 57
 むかしのけふ(昔の今日) 11
 むすびあぐ(掬ひ上ぐ) 28
 むすぶ(掬ぶ)〔28〕
 むめ(梅) 4〔5〕〔15〕
 むめのたちえ(梅の立ち枝) 5
 もしも(若しも) 64
 もの 28 36 41 48 75 85
 もみぢ(紅葉) 70
 もみぢば(もみぢ葉) 3
 ももよ(百夜) 25
 もゆ(燃ゆ) 23
 もり(森)〔48〕
 やがて 6
 やど(宿)〔8〕〔9〕 10 88
 やどがほ(宿顔)〔9〕
 やま(山)〔24〕〔29〕〔30〕 33 39〔49〕
 やまざと(山里) 31 34 37 50 54
 やまぢ(山路) 27 76
 やまのは(山の端) 30
 やまのゐ(山の井) 29
 やまべ(山辺) 36
 やみ(闇) 84
 やる(遣る)〔30〕〔34〕〔50〕〔88〕
 ゆかし〔11〕〔12〕
 ゆかしさ〔名詞〕 11 12
 ゆき(雪) 7 24 74 75
 ゆく(行く) 21 46a 81〔87〕
 ゆくへ(行方) 73
 ゆふべ(夕べ)〔82〕
 ゆめ(夢) 25 81
 ゆゆし 12
 ゆゑ(故) 26
 よ(世) 8〔19〕〔45〕〔52〕〔77〕 85〔88〕

よ(夜) (2) (34) (35) (37) (41) (52) (55) (58) (59) (59) (63)
 (64) (65)
 よ(節) (41)
 よごと(夜毎) (41)
 よしの(吉野) (24)
 よしののやま(吉野の山) 24
 よす(寄す) 62 65
 よそ(余所) 57
 よのつね(世の常) 88
 よふかし(夜深し) 37
 よもぎ(蓬) 87 88
 よる(寄る) (14)
 わが(我が) (8) (9) 48 60
 わがやど(我が宿) 8
 わがやどがほ(我が宿顔) 9
 わかる(分る) 42
 わかる(別る) 6 45 52
 わかれ(別れ) 「名詞」 17 44
 わく(分く) 51
 わする(忘る) 「四段」 77
 わする(忘る) 「下二段」 4 12 18
 わたり(辺) (74)

わたる(渡る) (69)
 わぶ(侘ぶ) (22) (60) (61)
 われ(我) 65
 ゐ(井) (29)
 を「接頭辞」 (51) (62)
 をぎ(萩) (13) (14) 47 54
 をぎのは(萩の葉) 13 14
 をぐらし(を暗し) 51
 をちかへる(復ち返る) 31
 をつ(復つ) (31)
 をばすて(嬖捨) 84
 をり(折) 34

この索引を見ると、『更級日記』の和歌用語において、繰り返し用いられる語が見られ、特定の語が頻出していることがわかる。次に七回以上用いられた語を用例数の多い順に掲げる。() 内に用例数を示す。

見る (19) ・ 思ふ (16) ・ 秋 (14) ・ 月 (14) ・ 夜 (13) ・ 来 (10) ・
 為 (10) ・ 人 (9) ・ 聞く (8) ・ 知る (8) ・ 無し (8) ・ 花 (8) ・
 春 (8) ・ 深し (8) ・ 出づ (7) ・ 風 (7) ・ 心 (7) ・ 尋ぬ (7) ・
 世 (7)

類出語のみで断言することはできないが、「月」「花」「風」のような自然の景物に関心を持ち、「見る」「聞く」のように視覚や聴覚を研ぎ澄ませ、「思ふ」「知る」のように心で感じたことを率直に表す語が多いように思われる。

特に「見る」という語が最も多く、「見ゆ」の四例を加えれば二十三例に上る。「見る」対象としては、月、花、山里の景色、人物や形見がある。「見る」は「目でとらえる」という意味で用いられ、「男車」の人が詠みかけてきた^{46a}を除けば、男女関係を思わせる意味では用いられていない。詠者が孝標女である歌に着目すると、「見る」「見ゆ」が用いられる時期に偏りはない。『更級日記』の少女時代から晩年にかけての場面においては、一貫して、景物や季節を視覚的に「見る」感受性の豊かさが見られるのではないだろうか。

次に多い「思ふ」について、十六例中八例は、複合動詞「思ひ出づ」「思ひ知る」「思ひ遣る」、連語「思ひの外」として用いられる。また、名詞「思ひ」の四例を含めれば二十例に上る。ここでは、「思ふ」が「見る」に続く類出語であることのみを述べておく。

三代集において四季の歌と共に大きな割合を占めるのが恋の歌であり、先行する女流日記文学『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』も恋の歌を多く載せている。しかし、『更級日記』八十八首すべてを見渡すと、恋の歌はほとんどないと言って良いだろう。例えば、時雨の夜に孝標女と資通、同僚の女房が春秋の優劣について語らう恋愛めいた場面においても、和歌だけに着目すると、恋の歌とは言い難

い。親しい間柄の男性かという説もある「水飲む人」との贈答も同様に、恋愛色の弱い歌だと思われる。

本稿で明らかにした『更級日記』における和歌用語の用例数から見る全体の傾向の分析、そしてこれらの用語が個々の歌の解釈、延いては『更級日記』全体の解釈にどのような影響を及ぼすのかについては、今後の課題としたい。

注

(1) 東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明編『平安時代複合動詞索引』(清水堂出版、二〇〇三年)。

(2) 注(1)に挙げた『平安時代複合動詞索引』が依拠した、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『更級日記總索引』(武蔵野書院、一九五六年)の索引編では、「霜枯れ」を活用語とは捉えていない。しかし、「霜枯れし梅」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形であり、その上の「霜枯れ」は動詞「霜枯る」と見たし。

(3) 「水かけ」について、新編国歌大観は「水のかげ」と翻刻しているが、底本である藤原定家筆御物本を見ると「水かけ」となっているので、本稿では「水かけ」とする。

(4) 「木」は、「木の葉」のような連語の一部となる場合に「こ」と読むが、単独では「き」と読んで項目を立てることとする。43番歌、66番歌の「木」についても同様にする。

(5) 「たずぬれ」の「ぬ」について、新編国歌大観は「ね」と翻刻しているが、底本である藤原定家筆御物本を見ると「ぬ」と

なっているので、本稿では「ぬ」とする。

- (6) 伊藤一男「歌の個性―浮舟詠をめぐって―」(紫式部学会編『むらさき』第二七輯、一九九〇年十二月)。

(ふじたてさやか 本学大学院博士課程前期課程在学学生)